

アルツハイマー病新薬

# レカネマブ期待大きく

## 徳大病院 臨時診療で対応

アルツハイマー病の新薬「レカネマブ」による治療を行うため、徳島大学病院が4月1日に開設した「MCI（軽度認知障害）・認知症外来」。受診者が多いため、臨時の診療日を設けて対応するなど、画期的な新薬に対する期待の大きさをうかがわせている。しかし、県内でレカネマブを投与できる医療機関は現時点で1カ所しかなく、体制を拡充する方向で調整が進められている。

アルツハイマー病の新薬「レカネマブ」(徳島大学病院提供)



MCI・認知症外来でレカネマブによる治療を受けている県内の男性は、3年ほど前に物忘れなどで仕事に支障が出るようになり、別の病院で若年性認知症と診断された。父親が重い認知症だったため、レカネマブが海外で承認された時から、日本でも使用できるようにする日を心待ちにしていたという。

### 投与機関など拡充へ調整



4月に徳島大学病院に開設した「MCI・認知症外来」の状況について説明する和泉教授＝徳島市の同病院

ないかと、私たちは恐れていた。だから、この薬は救世主。ものすごく期待している」と話す。政府が5月に公表した推計によると、認知症の高齢者数は2060年に645万人に達し、高齢者の17.7%を占める。こうした中で、認知症の原因として最も多く、症状も重いアルツハイマー病の原因となるタンパク質

「アミロイドβ」を排出し、原因物質に直接作用する。ただ、病状が進行すると効き目はなく、早期か予備軍の患者が対象となる。

「レカネマブは、アルツハイマー病をリセットできるという意味で画期的な薬だ」。MCI・認知症外来を率いる脳神経内科の和泉唯信教授はそう説明する。

従来のアルツハイマー病薬は、記憶を助ける神経伝達物質「アセチルコリン」を長持ちさせるのが狙いだった。これに対してレカネマブは、アルツハイマー病の原因となるタンパク質

「アミロイドβ」を排出し、原因物質に直接作用する。ただ、病状が進行すると効き目はなく、早期か予備軍の患者が対象となる。

MCI・認知症外来は和泉教授ら医師2人体制で、診療と電話相談をそれぞれ週2回実施。4～6月の3カ月間の受診者は60代～80歳の61人で、電話相談は53人を受け付けた。和泉教授は「診療は9月くらいまで予約が埋まっている。(通常の診療日以外に)臨時で診療しないと、さばき切れない状況」と話す。

受診者はアルツハイマー病かどうかを診る「アミロイドPET」などの検査を経て、レカネマブを使用できると診断される。2週間に1回の点滴を1年半をめぐりに続ける。治療費は公的保険と高額療養費制度を活用すること、70歳以上の一般所得層(年収156万～370万円)で年間15万円程度となる。

4～6月の受診者61人のうち、レカネマブの投与を始めたのは11人。投与開始率が2割ほどとなっているのは、投与対象と話す。

厚生労働省によると、レカネマブを投与できる全国の医療機関は、昨年12月に保険適用された時点で数カ所だったが、ニーズの高まりから300カ所ほどに増えている。投与するには専門医の配置や検査体制の要件があり、県内では今のところ、徳島大学病院に限られている。ただ、投与開始から6カ月以降の投与については、他病院も参画する方向だ。

レカネマブの効かない、進行したアルツハイマー病への対応について和泉教授は「治療のハードルは非常に高い。その人らしさを尊重し、共に生きていくためのシステムづくりが大切」と話す。

久保高茂